

明けましておめでとうございます。
謹んで新年のお祝いを申し上げます。

皆様のお正月はいかがでしたか。なかなかコロナ感染も下火にならず、インフルエンザも気になりますので、穏やかに過ごすことは難しい状況ではありますが、笑顔で新年を迎えられたことを願うばかりです。

さて、令和も5年目になります。5年という数字はひとつの節目のような気がして、今年も私も気合を入れて、取り組もうと思っています。

昨年末に久しぶりに自宅の本棚の整理をしていたら、一冊の本に目が留まりました。

「新装版 オイラーの贈物」という本です（吉田武さんの著作）。副題が「人類の至宝

$e^{i\pi} = -1$ を学ぶ」となっています。この式は「オイラーの公式」として有名で、映画にもなった「博士の愛した数式」（小川洋子さんの著作）にも出てくるそうです（すみません。私はこの本を読んでいません）。10年ほど前に、私がこの「オイラーの贈物」（500ページを超える大作）という本を買った理由は、冒頭の挨拶文に書かれている「本書は、唯一つの式オイラーの公式を理解することを目標に、基礎的な数学全般の学習が一人で行えるように工夫した、全く新しい形式の入門書である。」という文章と、あとがきに書かれている「・・・個性的な著作は、集団ではなく「個人の発想」によってしか生み出し得ないものであるから、話は簡単ではないのである。著作は人であり、人そのものである。人生の全てを賭けて挑むものである・・・」と言う文章に圧倒され、惹かれたからです（凄いいと思いませんか。「人生の全てを賭けて挑むもの」として一冊の本にその情熱を昇華させることに！それも「一つの公式を導くために書く」のですから）。

因みに、オイラー（1707年～1783年）という人は、18世紀に活躍した数学の大天才で、多大な業績を残したそうです。数学のど素人の私では、その詳細を語ることは無理なものの、俗にいうオイラーの公式の「美しさ」には私もなんとなく感じる場所があります（どこが美しいかと言いますと、 e =自然対数の底、 i =虚数単位と π を使うと、結果が -1 になるというもので、 e =解析学、 i =代数学、 π =幾何学という全く異なる分野が実は繋がっていて、それも大変単純な式で表現されているからです）。

私自身を含めて、もうすっかり数学なんかとは縁が切れた、或いは元々縁がなかった方々にとっては、こんな公式には全く興味はないと言い切るのは簡単なのですが、現代社会は数学なしには成り立っていないようです。そして、面白いのが、個別には何とか「学」と言うものが、本当はひとつの式で表せるように「それらが繋がっている」ことを知ることです。多分この世の中は、「目に見えないところで、あらゆるものが繋がっている」というような思いを抱けるのではないのでしょうか。

今年4月にNHKにて放映された「数学者は宇宙をつなげるか？ ABC予想証明をめぐる奇な物語」が話題になりました。それは日本人の数学者望月新一京都大学教授が最も重要な未解決問題「ABC予想」を証明したという一連の経緯に大変興味が湧くものでした。望月博士の論文は2012年8月に発表されたもののあまりの内容の難しさに皆が理解できず、7年半にもわたって研究者間で素読審査が行われ、2020年2月にやっと素読を通過し、一昨年3月に専門雑誌（PRIMS）に掲載されたという過去例の無いような経緯を辿ったのです。望月博士は16歳でアメリカの名門プリンストン大学に入学し、19歳で博士課程へ進み、23歳で博士号を取った世界が認める天才です（その後日本に戻り、32歳で京都大学の教授になっています）。

「ABC予想」そのものの説明も難しく、ど素人の私などは問題そのものがよくわかりませんが、この問題が解けることで、証明するのに350年以上もかかったあの有名な「フェルマーの最終定理」でさえも数ページで証明することができるという物凄い影響があるそうです。ひとつの問題の解決が他の様々な問題を解いていくという過程は、問題の連鎖・・・ものごとは裏で密かに繋がっているように私には感じます。

この超難問を解決するために望月博士が使った理論が「宇宙際タイヒミュラー理論」というものだそうです。面白いのは宇宙際（「うちゅうさい」と読み、後のタイヒミュラーはドイツ人数学者の名前です）という名前です。宇宙とは所謂星々の宇宙ではなく、数学の体系を表す例えば「宇宙」だそうで、ひとつの数学体系と別な数学体系をつなぐこと（「際」がこの意味）で「ABC予想」を解決するというような理論であるため、「未来から来た論文」と言われています。どうやら、世界の数学コミュニティではこの論文はまだ認められていないようです。あまりにも奇抜なアイデアで今までのパラダイム（規範）では理解できないため、論文発表から10年の年月が経っても認めない数学者がいるということらしいのです。ことの成否がどうなるのかは気になるところですが、私が面白いと思うのは、ここでもやはり「繋ぐ」（或いは「繋がれている」）ということが大事な要素になっていることです。

「オイラーの公式」にしろ、「ABC予想」にしろ、元となる様々な理論を繋ぐ（或いは「繋がれている」）ことで新しい世界が見えてくるように、我々の日常においても、個々人の主張はそれとして大事にした上で、個々人を繋ぐことで、全く新しい別な世界（社会）が見えてくるのではないのでしょうか。その繋ぎ方の表現が、例えば新資本主義論なり新コミュニティ論になると思えます。

サイモンズは新しい「繋ぎ」を求めて、今年も取り組みます。今年のテーマは、「WEB3.0の思想で循環型地域活性化システムを組み直す」です。果たして、どこまで進めることができるか・・・頑張ります！

それでは、引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。今年一年の皆様の

ご多幸を心よりお祈りいたします。

令和5年元旦

株式会社サイモンズ
代表取締役社長
斉川 満

2022年晩秋の眼鏡橋（諫早市）
（石橋として初の国の重要文化財）

